

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05710・19K20907

研究課題名（和文）18-19世紀の西アフリカとグローバル経済の関係の新解釈

研究課題名（英文）A new interpretation of West Africa in the global economy during the eighteenth and nineteenth centuries

研究代表者

小林 和夫（Kobayashi, Kazuo）

早稲田大学・政治経済学術院・准教授

研究者番号：00823189

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：従来の従属論的解釈では、18-19世紀の西アフリカは、大西洋奴隷貿易や換金作物貿易などにおいて、グローバル経済の「受動的な犠牲者」と位置付けられてきた。しかし本研究では、貿易統計や、文書館資料および同時代刊行物を通じて、西アフリカの消費者—とくにインド綿布に対する彼らの需要—が同時代のグローバル経済に影響を及ぼすアクターであったことを明らかにした。その代表的な成果として、2019年にパルグレイヴ・マクミラン社から英文単著を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、18-19世紀の西アフリカにおけるインド綿布の需要に代表される、サハラ以南アフリカ（Africa South of the Sahara）と南アジア（South Asia）の経済関係史（south-south economic history）を世界経済史解釈の新機軸として打ち出した。それによって、グローバルな枠組みのなかで大西洋奴隷貿易や換金作物貿易、西ヨーロッパの工業化、近代世界経済の興隆過程などの理解に資する視点を得ることができる。

研究成果の概要（英文）：Dependency theorists proposed the view that West Africa was a 'passive victim' of the global economy through the Atlantic slave trade and the subsequent cash-crop trade during the eighteenth and nineteenth centuries. In contrast, this research project illustrates that consumers in West Africa - in particular, their demand for Indian cotton textiles - were active actors who influenced the global economy during that period. As the major output, I published a monograph (Indian Cotton Textiles in West Africa: African Agency, Consumer Demand and the Making of the Global Economy, 1750-1850) from Palgrave Macmillan in 2019.

研究分野：経済史

キーワード：グローバル・ヒストリー アフリカ経済史 西アフリカ インド綿布 大西洋奴隷貿易 近代世界経済
熱帯 西アフリカと南アジアの経済関係

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

近年、サハラ以南アフリカ（以下、アフリカと記す）の急速な経済成長が注目されている。開発経済学の知見によれば、その経済成長は、アフリカの資源・一次産品の輸出と消費爆発によって支えられている（平野克己『アフリカ問題』2009年、227頁）。その現状を歴史的文脈のなかに位置づけるために、本研究では次の課題を設定した。すなわち、過去数世紀におけるアフリカの人々がグローバル経済に与えてきた影響の解明である。

このような課題に取り組んでいる経済史研究は、アフリカ製造業の歴史的展開に着目したケンブリッジ大学のギャレス・オースティンらの論文（G. Austin et al. 'Patterns of Manufacturing Growth in Sub-Saharan Africa', in K. O'Rourke and J. Williamson (eds.), *The Spread of Modern Industry into the Periphery*, Oxford, 2017）がみられる程度で、まだ萌芽的段階にある。しかし、20世紀後半に「東アジアの奇跡」と呼ばれたアジア経済の急成長を背景にして、杉原薫（『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房、1996年）がアジア経済の発展の世界史的重要性を問題提起したことを考えれば、世界経済史におけるアフリカの位置付けの再考も喫緊の課題といえるだろう。

2. 研究の目的

このような背景を踏まえて、本研究では、西アフリカを研究の対象地域と設定した。それは、利用できる史料の状況によるところが大きい。また、各時代における西アフリカの人々の主体性を明らかにするために、(1) 18世紀を中心とする大西洋奴隷貿易の時代と、(2) 19世紀の換金作物貿易の時代の2つに焦点を当てた。その上で、本研究では、これらの時代を通じて、西アフリカの生産者・商人の選択や消費者の嗜好がグローバル経済にどのような影響を及ぼしてきたかを明らかにすることを目的とした。具体的には、18世紀の黒人奴隷に加えて、19世紀のパームオイル、アラビアゴム、落花生といった商品の輸出動向とそれらの対価として西アフリカに輸入された繊維製品の消費状況について、貿易統計と文書館所蔵史料、同時代刊行物などを踏まえ、当時の西アフリカの人々の主体性の解明に取り組んだ。

3. 研究の方法

18-19世紀の西アフリカとグローバル経済の相互作用の解明するために、本研究では、第一に、英仏両国の貿易統計及び植民地統計を用いて、パームオイル、アラビアゴム、落花生といった主力輸出品の貿易動向を把握した。第二に、同時代刊行物や植民地官僚の記録などから、換金作物生産・輸出に関与した生産者や商人が、この貿易活動から得た利益によってどのような輸入品を入手していたのか、また可能な範囲でその需要の背景を詳らかにすることを試みた。とりわけ、18世紀の西アフリカの輸入貿易のなかで重要な位置を占めていたインド綿布とモルディヴ産宝貝に対する需要に注目し、西アフリカと南アジアの経済関係が19世紀を通じて緊密になったのかどうか考察した。これらの研究を補完するために、これまでにイギリス、フランス、セネガル、ガンビア、インドの文書館や研究所などで収集してきた史料も活用することにした。

4. 研究成果

本研究の主たる成果として、2019年にパルグレイヴ・マクミラン社から英文単著 *Indian Cotton Textiles in West Africa: African Agency, Consumer Demand and the Making of the Global Economy, 1750-*

1850 を刊行した。従来の従属論的解釈では、18-19 世紀の西アフリカは、大西洋奴隷貿易や換金作物貿易などを通じて、ヨーロッパ諸国によって「低開発化」を押しつけられたグローバル経済の「受動的な犠牲者」と位置付けられてきた。しかし、本研究では、貿易統計や、文書館資料および同時代刊行物を通じて、西アフリカの消費者—とくにインド綿布に対する需要—もまた、同時代のグローバル経済にとって無視することのできないアクターであったことを明らかにした。少なくとも 19 世紀半ばまでは、アフリカ大西洋岸でヨーロッパ商人が現地商人と取引する際に、アフリカの消費者が求める商品を持っていなければ、黒人奴隷や様々なアフリカ産品と交換することができなかった。これは、当時のヨーロッパ人が、アフリカ大陸—とくに内陸部—について地理的情報に乏しく、またマラリアなど環境条件が彼らを容易に内陸に入り込ませなかったことと関係している。

したがって、大西洋奴隷貿易の時代では、西アフリカの消費者の需要に応じた商品供給こそが、ヨーロッパ商人による黒人奴隷の購入を左右していた。ヨーロッパからアフリカに輸入された商品は多岐に及んだが、18 世紀の第二四半期以降についていえば、インド綿布が最も大きな比重を占めていた。もともと西アフリカでは、イスラームの普及以来数世紀にわたって、地域内で良質の綿布を生産・流通・消費していたことから、西アフリカの消費者は繊維製品の品質に対する独特の嗜好を形成していた。彼らの嗜好と一致しない輸入繊維製品は取引されなかった。そのため、ヨーロッパ商人には、西アフリカ市場の動向に応じた商品調達をすることが求められ、同時代のイギリス東インド会社の史料などには、アフリカ向けの特定の色や模様の入った綿布を調達することを求めたインド各地の商館宛の書簡が残されている。他方で、18 世紀のヨーロッパの製造業者のなかには、インド綿布を模倣して、西アフリカ市場向けの製品を生産するものも現れた。これは、西ヨーロッパの工業化の一側面を形成するとともに、いわゆる「三角貿易」論の一環として語られがちな大西洋奴隷貿易が、同時代のアジア貿易との関連抜きに論じられないことを示している。また当時のインド—とくに西アフリカ向けの藍染綿布を生産していた南インド—におけるヨーロッパ人の綿布調達については、18 世紀半ば頃まで前貸制度に基づいていたが、綿布の仕上がりは織工のパフォーマンスに左右されがちであった。綿布の品質をめぐる問題は、18 世紀後半にイギリス東インド会社が制度変化を試みても容易に解決に至らなかった。

このようにしてみると、西アフリカの消費者と南アジアの繊維生産者の主体性に左右されつつ、大西洋奴隷貿易が展開していった状況が浮かび上がってくる。そこで、本研究では 18-19 世紀の西アフリカにおけるインド綿布の需要に代表される、サハラ以南アフリカ (Africa South of the Sahara) と南アジア (South Asia) の経済関係史 (south-south economic history) を世界経済史解釈の新機軸として打ち出した。この関係は、18 世紀の大西洋奴隷貿易の最盛期を中心として、大西洋経済の発展や西ヨーロッパの工業化にとって重要な役割を果たしたが、19 世紀に欧米諸国で奴隷貿易が廃止されて、西アフリカの海上貿易の中心が換金作物に移行した後にも、ある程度存続していた。この時期に、西アフリカと南アジアの経済関係は、南インドのポンディシェリで生産された藍染綿布ギネとモルディヴの宝貝によって特徴づけられていた。ギネは、ヨーロッパ (フランス) 商人がセネガルから良質のアラビアゴムを購入するために、交換媒体として用いられていた。このアラビアゴムは、19 世紀半ばまでは西ヨーロッパの繊維産業で布の色の固定などに必要とされていた。その代替品がまだ開発されていなかったことも抑えておきたい。19 世紀の西アフリカ沿岸部の多くの地域では、イギリスの影響力が大きくなっていったこと、またランカシャーの製造業者のロビー活動によってインド綿布の貿易量は停滞・減少したことを背景にして、安価なランカシャー製品の輸入量の躍進がみられたが、フランスが支配していたセネガルでは、インド綿布の輸入量が引き続き増加していく状況がみられたのである。セネガルで、ヨー

ロッパ製ではなくインド製のギネが好まれた背景には、布の品質と消費者の嗜好をめぐる問題があった。少なくとも19世紀半ばまでのヨーロッパでは、インド綿布をまだ完全に模倣することができず、セネガルの消費者の嗜好に一致する質の綿布を生産できなかった。それはまた、1830年頃からポンディシェリに蒸気機関を用いた当時の最新型の紡績機をパリから導入して、セネガルを主な市場とするギネ生産を行うことにも結びついた。19世紀前半でも、西アフリカの消費者の需要と南アジアの綿布生産の関係のもとに、換金作物貿易が展開し、西ヨーロッパの工業化と結びついていたことがうかがえる。

以上から得られる含意は、19世紀にヨーロッパと他地域との間に確立したグローバルな分業に基づく近代世界経済の興隆は、先行研究でしばしば指摘される「中心—周辺」関係だけで説明されるのではなく、時には「周縁的」ともみなされる「周辺」の地域の人々の主体性を考慮すべき点である。この点については、多元的なグローバル化といった視角から検討する必要がある。

なお、上記の英文単著の概要については、2019年2月にユトレヒト大学（オランダ）の経済社会史セミナーで発表した。また、同年7月に、京都大学大学院経済学研究科にて開催された史的 analysis セミナー、および同年10月にウォーリック大学（英国）で開かれたワークショップで発表し、参加者と議論を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林和夫	4. 巻 85
2. 論文標題 19世紀の西アフリカにおけるパームオイル生産と輸出－W.A. ルイスの「熱帯の発展」論・再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会経済史学	6. 最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuo Kobayashi	4. 巻 First view
2. 論文標題 The English East India Company's Silk Enterprise in Bengal, 1750-1850: Economy, Empire and Business. By Karolina Hutkova. pp. 275. Woodbridge, Boydell Press, 2019	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of the Royal Asiatic Society	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1356186320000012	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 小林 和夫
2. 発表標題 New Book Talk, "Indian Cotton Textiles in West Africa: African Agency, Consumer Demand and the Making of the Global Economy, 1750-1850"
3. 学会等名 史的分析セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuo Kobayashi
2. 発表標題 The Core-Periphery Model Reconsidered
3. 学会等名 Categories at Work in Global History（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuo Kobayashi
2. 発表標題 Indian Cotton Textiles in West Africa, 1750-1850: African Demand and the Emergence of the Modern Global Economy
3. 学会等名 Economic and Social History Seminar, Utrecht University (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Kazuo Kobayashi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 xvii, 258
3. 書名 Indian Cotton Textiles in West Africa: African Agency, Consumer Demand and the Making of the Global Economy, 1750-1850	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap https://researchmap.jp/kkobayashi/
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----